



東大生はタフになったのか

箱根駅伝は正月の風物詩である。この駅伝に東大チームが出場したことがある。1984年の60回記念大会で出場枠が増えたこともあるが、それ以上に当時の駅伝チームが数年計画で本気で練習に取り組んだ結果でもある。

私が入部したのは1978年。先輩たちの活躍で東大陸上部は関東学生選手権の一部に昇格したばかりだった。この頃の陸上部には8年生を筆頭に様々なツワ者がいた。各学部のいろんな出身校の部員が記録更新をめざして自分の頭で考えながら自己研鑽していた。いい加減そうでも試合前には集中力を高め必ず試合に勝つ「ここぞという時に頼りになる」先輩がいた。他校の一流選手を相手に彼らの活躍で一部校の座を3年間守り抜いたが、私たちが4年生の時に二部に落としてしまった。

田舎の県立高校出身の私にとって“この東大”は想定外のスケールだった。入部当初の私はプレッシャーに弱く試合で記録を出せず先輩にボロクソ言われて悩んでいたが、選手層の薄い^{とつてき}投擲を始めて“開き直り法”を覚えると記録が伸び、上級生になると十種競技ができるようになっていた。自分の人間的成長は東大陸上部で培われたといっても過

言でない。この4年間で学んだ「人間のスケール感」は人生の大きな財産になった。

学部卒業後、私は大学院に進学し、運よく地方大学の助手になった。大学教員歴は今年で33年、うち半分は東大である。この間、私は専門教育に加えて常に「人間のスケール感」を意識しながら学生と接してきた。

さて、東大生はタフになったのか？ここ5年くらいを境に流れが大きく変わったように思う。女子学生は確かにタフになった。アフリカやフィリピンの山奥に単身で乗り込んで活躍していたりする。それに比べて男子学生の不甲斐なさが気になる。自立できていないのである。東大男子は駒場時代にもっと冒険して、多様な人間に出会い、とことん衝突して、失敗し、それを克服する訓練が必要だ。それができないなら家事をこなせる良き夫として女子のサポートに徹したほうがよい。

とは言えこれは元運動会東大生の戯言。今は昔とは違う。現役東大生には新時代に適した道を開拓してほしい。

溝口勝

(農学生命科学研究科)